

エッセイ

80年の偶感

黒田 一 秀

私の母校北大は、東京芝増上寺の境内に設けられた「開拓使仮学校」時代から数えると120年以上の伝統があるが、入学した医学部が創設されたのは、北海道帝国大学となってからである。それにしても、1919（大正8）年の創設であるから、去年で80周年だったわけである。実は私の生年は1920年であり、今年2000年、人々がミレニウムとか言って騒いでいる年に満80歳を迎えたことに、数字の切れがよいせいも、何か嬉しような気もしている。1920年頃の日本は、いわゆる大正デモクラシーという呼称の与えられている時代、モボ（modern boy）・モガ（modern girl）なる言葉の生まれた時代であった。

明治の日露戦争（1904-05）でようやく戦勝国になった日本が、大国意識を剥き出しにし、軍備拡張、増税、植民地経営に乗り出す一方で、地方農民や商工業者の社会不安や生活防衛的な社会運動が、学者や社会運動家を抛りどころに民衆運動としてひろがり、さらにそれが、第一次世界大戦（1914-18）を通して、いろいろな形、思想というよりはひとつの社会状況となっていた時代。私は自分の生まれた頃をこう捉えている。それから間もなく、関東大震災（1923）後の復興活動によって新しい都市生活のスタイルが導入されたのと相前後して、社会不安などを口実に、国家主義・思想統制などが始まってきたようである。小学生頃の私でも、アカ・社会主義・過激派・改造・ストライキなどの単語を知っていたし、軍隊や国のすることに何か恐ろしい非情なものを感じともいたのだった。しかし今振り返って、私は大正デモクラシーの時代に生をうけたことをとても良かったと思っている。それは、物事をいろいろな面から見る態度とか、与えられた状況をなるべく楽しく受け取ろうとするリベラルな気持ちとかが、その頃に知らず知らずのうちに養われたのではないかと想像されるからである。

北大予科医類3年を修了して、医学部1年の時、解剖室での実習の最中に日本海軍の真珠湾攻撃の報道を聴いた。学部3年だった1944（昭和19）年の9月、海軍軍医学校に入学を許可され、全国から集められた医学生の各医学部合同卒業式が戸塚海軍軍医学校の校庭で挙行されたこと、軍艦乗組を経て特攻部隊付の軍医中尉で終戦を迎え、その年の9月には母校北大の皮膚泌尿器科学教室の副手に採用されたこと、それらが私の医学医療との本格的なつき合いの始まりであった。

ところで、私達が医学生として教育を受けたのはドイツ流の西洋医学であった。海軍の軍医学校、病院、軍艦などの実施部隊などではイギリス流の片鱗に触れることもあったが、大筋は明治以来のドイツ流医学であった。それは、東京大学医学部の創設に努力しその育成に尽くしたお雇い外国人教師ベルツやスクリバなどに始まっている。私達が大学で学んだ医学は、ほとんどがドイツ語を介したものであり、それが太平洋戦争の敗戦まで一貫して続く伝統であった。まして戦時中の日本は、医学的には、ドイツからの影響を除けば全くの鎖国状態にあった。最近あまり耳にしないが、つい近年まで、診療記録を一般の人がよくカルテというドイツ語で呼んでいた。これは、患者さんやその家族や関係者たちが医者や診療に対して率直に疑問を突きつけることができるようになった、いわゆる戦後民主主義の、皮肉な申し子である。もうドイツ流医学の時代でもないのに、証拠書類の呼び名がドイツ語で親しまれつづけてきたわけである。もっとも、戦争が終わってアメリカの文物が医学医療の分野にも洪水のように押し寄せてきた時でも、私の専攻の泌尿器科の日本のレベルは、スルフォンアミドの科学療法剤の時代のまま、10年も遅れていたようである。

ともあれ、こうしていち早く母校に復帰できた私は、その後、再生日本の当初から今日の医療への50余年の変遷を一貫して体験できたわけで、何か歴史以前の原始の医療から現代の先端医学医療までを一挙に垣間見たような、そんな錯覚すらおぼえている。それほど戦後の医療の変遷進歩は目覚ましかった。

人体の解剖学的構造の肉眼的観察から始まって、ミクロの分子生物学的構造に限なく解明され画像化されるようになり、さらには、目に見えない心理活動・精神活動の知見までもが蓄積されている。あらゆる学問分野から人間の心身が探究され、そのデータが蓄積され、個々の病人の所見がつぶさに特定できるようになってきた。「そんなことも解るの」と、この老人は驚嘆するばかりである。

しかし、医療の現場に関しては、最近、いろいろと事故の報道を耳にすることも多くなった。人間行動の至らなさにも思いをはせざるを得ない。現在の医療技術は非常に専門分化している。したがって、多種多様な資材を併用し複数の施術者のチーム・ワークを必要とする。その分だけ参加者各自の行為は却って単純化し、効率優先主義に陥りやすい。

それに関連して思い浮かぶのは、日本近代医学黎明期の指導者、先述のお雇い外国人教師ベルツが、ちょうど100年前の1900（明治33）年に、在職25周年の祝賀会で発した苦言である。「これからは日本人は自分自身で仕事をするようになる。だが、科学の起源と本質について、日本の人々はしばしば間違っ理解している。西洋人の教師たちは西洋の考え方を日本国民のものにしようと努力したが、しばしば誤解された。日本人は最新の成果を引き継ぐだけで満足し、成果をもたらした自然探求の精神を学ぼうとはしない」。ベルツは、明治新時代の日本人の、すぐに役立つ技術成果だけを享受しようとする和魂洋才思想に、危惧を表明しているのである。今でも我々の周囲には、自分の病変の構造を理解しないまま手っ取り早く適当な処置を望む患者さんと、説明もないままに性急に対処する医者といった、そんな困った取り合わせも、なしとしないのである。そういう風潮が、昨今頻発している各種医療事故の温床ともなっているような気がしてならない。

短兵急に真実よりも効果だけを望むことは、西洋医学では本来考えられないことである。戦後半世紀、狭くなった地球の上で、洋の東西を問わず科学知識技術は限りなく細分化し拡大し、とても個々人の能力では対応できなくなってきた。EBM (Evidence-based Medicine) などという言葉さえ出現している。証拠に基づかない医学などあるはずもないと思いたいが、こうした言葉が登場するのは、現代日本の医療適応にも問題があるからである。自然には宇宙であれ人体であれ存在の理法と構造があるという見解と、形もなく限界もない宇宙の生氣の中で万物は陰と陽の関係として存在するのだという東洋的自然観との、決定的な矛盾のせいなのであろう。結局のところ、本物の医療は、日本の社会が西洋の合理的自然観にもつとなじんで、世界に通用する新しい宇宙像をもつようになったとき、初めて生まれるのであろう。ベルツ先生の心配はもうちょっと続くのではないだろうか。

旭川医科大学創設期のころ、広報紙「かぐらおか」に、「キャンパス内に講義棟ができ北門町の仮校舎から大学が移転した。私は市立病院内の暫定施設から通うようになった。大正橋で忠別川を渡る時、組み上げた研究棟と病院の鉄骨が樹々の上に見える。周囲とよく似合うよい景色である」、云々と書いた。その後26年間に大学のクリーム色の建物群は2,315人の卒業生を送り出し、病院は224,764人の患者さんを診療した。そして今、橋の向こうに病院棟増築の新しい鉄骨群が新しい姿を見せている。来年3月完成予定の由である。20余年を経た今でも、旭川医科大学の建物群の姿は沢山の人の喜びや悲しみを包み込んで、懐かしさと希望のシンボルであり続けている。ここを拠点にいろいろな仕事をされているお一人お一人の今後益々のご活躍を、衷心より祈ってやまない。

(旭川医科大学名誉教授・第2代学長)